

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 李先胤

李先胤氏の博士学位請求論文「水の表象と暴力批判——安部公房における科学的認識と文学——」は、これまで代表作「砂の女」を中心に、砂あるいは砂漠の表象を軸に考えられてきた安部公房の小説世界を、水の表象から全体的にとらえ直すことを試みた論文である。

李氏は、流動し形体を固定することのない砂と水を相補的な関係性にあると捉え、具体的な表象の分析を通じて、それぞれの小説における水が、個体の生と死にかかわると同時に、歴史の転換期における暴力と深く関連していることを明らかにした。

序論で安部公房の文学活動全体を概観したうえで、本論文の第一章では、安部が自らの文学方法論を提示する際に用いた「怪物」という概念について検証が行われていく。「怪物」という概念は、ロシア・フォルマリズムやブレヒトの「異化」概念と類似しており、小説ジャンルの規範的枠組を崩し、問い直す契機として位置づけられていることがまず明らかにされている。そして「空想」だけでなく、「合理的な仮説」を内在させているサイエンス・フィクションのジャンルを、同時代の文学に対して「怪物」の役割を演じる領域として発見していく安部の主張が、同時代の歴史的状況とのかかわりで論じられている。

第二章では初期の短篇「洪水」を起点にしながら、「水中都市」、「第四間氷期」などにおいて主題化される、氾濫する水と「ノアの方舟」の表象が、戦後日本社会のGHQの統治から朝鮮戦争にいたる過程と重ねられながら分析されている。そして、『榎本武揚』、『けものたちは故郷をめざす』、『方舟さくら丸』などの小説世界にも言及しながら、洪水と方舟の表象が、近代日本におけるいくつかの旧体制の崩壊と新体制への転換の象徴になっていることが指摘されていた。

第三章では、前半でも分析の対象となった、いくつかの小説にみられる、裁きと排除の空間の特徴が、国家や主権とのかかわりで論じられている。その過程において、閉鎖されている空間がどのような力によって、その囲いを外されているかが検討され、民族や人種の問題にまで言及されていくことになる。

第四章では、安部が非現実出来事を小説で描く際に使用する、科学的な言説の特徴が分析されている。なかでも水の表象の仕方において、液化、気化、凍結と位相を異にする特徴に注目し、同時代の自然科学とのかかわりを明らかにしている。そして水の変形が人間の身体とも結びつけられ、安部における「怪物」性の全体像がとらえられていく。

李氏の論文の独自性は安部の小説における「洪水」に注目し、そこに人間世界を無化してしまう暴力性を見い出すと同時に、新しい秩序のもとに世界を再編する力が与えられていることを明らかにしたところにある。

また安部が、自然科学の理論的な認識をふまえ、流体力学的な運動性や、過冷却などの、位相を転換する性質を科学的に記述しながら、独自のサイエンス・フィクションの可能性を切り拓いていったことを明らかにしたことも重要である。

安部はサイエンス・フィクションに、「怪物」としての文学の可能性を見い出していた。科学的な認識を、文学的な水の表象の中にとりこむことによって、独自の「怪物」性の概念を安部が創り出していくことが指摘されたうえで、この「怪物」性が、それまでに自明化された認識の枠組を崩していく機能を持つことを示したことも李氏の論文のすぐれた点である。

もう一つの重要な達成点は、安部公房の複数の小説における船の表象の分析によって、社会の体制の転換期において発動される暴力に対して、人間の側がそれをどのように乗り切っていくとするのかが明らかにされていることである。そして、聖書における「ノアの方舟」と「洪水」の意味を喚起させながらも、同時代の歴史的、現実的な状況と小説世界が結びつけられ、旧体制が戦争や革命によって崩れ、新しい体制がつくられていく際の暴力の在り方が、戦後日本の現実とのかかわりで分析されていたことである。

「ノアの箱舟」という終末論的イメージがなぜ戦後社会で顕在化したのか、あるいは「水」のイメージと女性性の関係についての分析が不十分であるという指摘も、審査の過程で提出された。

しかし、それまでの安部公房論において行われることのなかった「水」の表象分析を中心にすえ、初期から後期にいたる小説の全体に共通する特徴であることを証明し切ったことは、審査において評価された。閉塞した時代状況に対して、安部がその限界を突破しようとした、言葉による表象の可能性を示したことも評価の対象となった。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。